

研究論文

発達障害が疑われる幼児の母親に対するビデオフィードバックを活用したペアレントトレーニングの効果

石塚 誠之¹⁾ 狩野 信也²⁾

1) 北翔大学教育文化学部教育学科 2) 土幌町発達相談センター・土幌町認定子ども園

抄 録

本研究では、ビデオフィードバックを活用したペアレントトレーニングの手続きが、発達障害の疑われるA児とその母親に及ぼす影響について、主に母親の支援・養育行動、A児の行動変容に焦点をあて検討した。ビデオは家庭での課題の様子を母親が撮影したものをを用い、ビデオフィードバックはビデオ視聴、親によるコメント、スタッフからのコメントで構成された。介入場面として主に「応答場面」を取り上げ、作成したコンサルテーション後の記録を下に家庭での支援を行い、母親の行動変容をビデオにおける行動観察から評価した。また、児童の変容を子ども園における行動、保育士によるSDQによって評価した。結果、母親の受容的な関わりに変化が見られた。特に、(1)子どもからの呼びかけ生起率、(2)母親の応答生起率、(3)視線をA児に向ける頻度に増加が見られた。また、家庭だけでなく、母親がいない場面においても主体的な行動が増加したことが示され、トレーニング後の認定こども園担当者が実施したSDQでは「多動・不注意」、「総合得点」で困難さが低減していた。母親の発言やアンケート結果からも、ペアレントトレーニングにおけるビデオフィードバックの有効性が示唆された。

キーワード：発達障害、ペアレントトレーニング、ビデオフィードバック、幼児
発達相談センター

I. 問題と目的

発達障害児への支援方法としては、児童のもつ障害特性に焦点を当てその改善を目指して支援する方法が一般的である。ただ一方で、発達障害児に対する支援において、その親を支援の対象として含めることで児童の行動変容を効果的に促す研究が進んでおり、2005年の発達障害者支援法においても親や家族に対する必要な支援を行うことが定められている。

発達障害のある児童の親への支援として、「保護者」の学習会において、年齢により施設を退所した子をもつ親を招いて体験を語ってもらうことや、講師を招いて発達障害児の支援方法を学ぶ機会を設ける活動などが行われるが、個々の子どもの特性が違うために、自分の子に当てはめて適切に支援することは難しいと感じている親が多い。また、保育者の助言と実際の家庭での支援場面において、対応のずれが生じていたり、支援自体が不十分であったりすることで、適切な支援による障害児の行

動変容を促すことは容易ではない(上野・野呂, 2011)⁵⁾。実際に親支援に関する研究について検討した原口・上野・丹治・野呂 (2013)¹⁾は、個別支援では単一の事例検討が多く、行動変容に関して客観的な指標を用いる必要があると指摘している。親支援に関して家庭内の行動変容を客観的に測定する方法の一つにビデオの活用があり(杉原・米山, 2014)³⁾、ビデオフィードバック(以下VF)が効果的な介入方法の一つとして報告されている(上野・野呂, 2010⁴⁾;上野・高浜・野呂, 2012⁷⁾;杉原・米山, 2014³⁾)。上野・野呂 (2010)⁴⁾の研究では、3名の自閉症児の母親に対してVFとチェックリストを用いた介入を実施し、児童の自立遂行率が増加したことを明らかにした。特に、VFとチェックリスト形式の筆記記録を併用することで、親の関わりが変容し、子どもの行動目標も達成された。一方で集団形式のペアレントトレーニングへの適用に向けて、親がチェックリストを作成できるような介入内容を検討していく必要があると報告している。また、近藤 (2011)²⁾は、ビデオから自発的に気づきを深めることができた対象者はわずかであり、

支援者のコメントが重要と述べている。

これらのことを踏まえ、VFにおいて、親が評価表を用いて選択した視聴場面を見ながら、気になる場面でビデオをストップさせ、コメントの代わりに気づきを促す質問を多用することで行動変容を促す効果が期待される。これらは、例えば、声かけのタイミングがつかめない、どんな声かけをしたら良いかわからない、子どもの行動をコントロールしすぎてしまう親に対する支援、特に音声言語でのコミュニケーションが難しい児童や発達障害の幼児の親支援として効果が期待される。以上のことにより、本研究では、発達障害が疑われる幼児の母親に対して、VFを用いたペアレントトレーニングを実施し、母親の主體的な関わりを促すことで、子どもの自発的な行動の増加やコミュニケーションへの影響が認められるか明らかにすることを目的とした。

II. 方 法

1. 対象者

北海道にある町立発達相談センターに通う発達障害が疑われる4歳2ヶ月の男児A児（主訴：言語発達遅滞）1名とその母親を対象とした。家族は両親と本児の3人であった。発達相談センター通所歴は2ヶ月であり、これまでペアレントトレーニングに参加したことはなかった。在籍する認定子ども園においては、言葉が不明瞭で周りの幼児とは、積極的に関わることがほとんどなかった。また、自分から行動したり、発話したりすることも少ない様子で、遊びの場面では、ほとんどの場面が平行遊びであった。朝、園に通うときには、母親と離れようとせず、教室に入ることができないといったように、母子分離が難しい状況であった。年度途中の入園であったため、園では支援教諭の配置ができていなかった。母親からの聞き取りによると、家庭場面でのA児との会話において母親は、おおよそA児の言いたいことが理解できている。また、遊びが好きであり、指示があればできることも多いと伝えられていた。家庭では主に母親がA児の養育をしていたが、父親は、休みになるとA児と遊んでくれていた。母子間において、A児は母親に園での出来事を伝えていたり、一緒に遊ぶ・指示に従うことができたりするということから愛着形成ができていると考えられる。

発達相談センターにおけるアセスメントとして、『ことばの発達絵本』、『行動観察』を実施した結果、『ことばの発達絵本』では、数概念の形成ができおらず、数詞のカウントができなかった。表出言語は3語文程度であり、イ列音にひずみがあった。会話明瞭度は、聞き

手が本児との会話に慣れていればわかる程度であった。また、『行動観察』では、促されると行動できたが、気持ちの表出が弱く、自己刺激行動が見られた。

2. 手続き

ペアレントトレーニングプログラムの運営（内容・実施）については、本児のことを継続的に指導している発達相談センター職員が担当した。プログラムの開始前に、母親に対して概要の説明を行い、研究参加への同意を得た。

プログラムの参加は、A児とその母親であった。プログラムは、上野・野呂（2012）の研究を参考に作成し、週に1回の実施とした。また、セッションでは、主に課題報告と個別相談で構成し、課題報告約30分の後に1時間ほど個別相談の時間を設けた。VFは町立発達相談センターにて行った。VFの手続きは、①前回の母親の発言の確認、②家庭で撮影されたビデオの映像を視聴、③母親による発言、④担当者による発言で構成された。VFを行う際、視聴場面は、母親が記した評価表をもとに、担当者が選択した。担当者と母親で視聴しながら相互にストップをかけ、気づきを述べ合った。課題に対する助言よりも母親自身の気づきを重視しており、担当者がビデオを止めた場面で質問を投げかけることにより、母親の気づきを促すようにした。また、気づきや助言の記録用紙を母親に渡し、家庭での支援への手がかりとすることにより、母親の応答の変容を促した。応答場面の設定については、『ごっこ遊び』として①のりものごっこ、②買い物ごっこ、③怪獣ごっこ、④カルタ、⑤その他、児童が好きな遊びを設定した。『製作遊び』として、①はさみやのりを使った工作、②絵を描く、③折り紙を折る、④おやつを作る、⑤その他好きな物を作るなどを設定した。実際の応答場面ではこれらの中から母親に好きな物を選択させた。

子どもの目標行動は、SDQ（子どもの強さと困難さアンケート）の結果及び、母親に対するニーズの聞き取りの結果を参考に基本的には母親が考え、それに基づいて個別面接の中で母親と担当者が相談して決定した。A児の目標行動として自発的な行動の表出が少ないことから、①自発的な行動を起こす、②自発的に言葉を発することができるの2点を標的行動とした。

母親は担当者と決めた課題について、次のセッションまでの間に家庭で実施することとした。行動目標に対する母親のプロンプトとして以下の3つに焦点を当てた。①先行刺激を与える（〇〇したのかな？、どうしたらよいのかな？等）②選択肢を与える。（何をしたいのかな？、〇〇と□□ではどちらがいいのかな？等）③自発的な行動、発話の直後の言葉がけ（母親の気持ちを伝え

る、ハイタッチをする等)。

記録は、構成された場面(遊びや製作、おやつ作りなど)において、固定したビデオの撮影により実施した。撮影の方法については事前に説明を行った。特に、カメラの位置、三脚の使い方、親子が課題を行っている様子がわかるように撮影すること、必要に応じて第三者に撮影してもらうことを教示した。

ビデオ撮影では、週に1・2回程度でも良いこととし、負担にならないように配慮した。ビデオ撮影については、ビデオの映像が長い際には、できるだけやり取りの様子に焦点が当たるよう、一部早送りにして行った。セッションは週に1回で計6回実施し、1回目に研究紀要の説明及び注意事項の説明、2回目に計画の策定、6回目に全体についての評価を行った。その際に、上野・野呂(2012)の社会的妥当性の評価を参考に用いた。

3. 分析方法

従属変数は家庭用ビデオに基づいた親子の行動観察と、個別相談時の母親と担当者の面接記録とした。ビデオに基づいた親子の行動観察：母親の行動の評価については、母子いずれかの初発で始まる会話の連続を一つとして捉え、会話が途切れて5秒たち、やり取りが終了していた際、または話題が切り替わった際にそのやり取りが終了したと判断した。撮影されたビデオのやり取りの総数は48回から95回であった。行動に関しては、①やり取りの初発が母親からか子どもからか、②やり取りの距離が近いか遠いか、③視線が合っているか、合っていないか、④子どもの注目を促しているかどうかで評価を行った。信頼性を確認するため、特別支援学校教諭の免許を取得し、特別支援教育について学ぶ大学院生及び教員の2名が評価し、一致率は80.2%であった。

Ⅲ. 結 果

1. SDQで見たビデオフィードバックのペアレントトレーニングの効果

アセスメントとして実施したトレーニング前のSDQ(子どもの強さと困難さアンケート)の結果から、母親は『仲間関係』、『向社会性』の下位尺度でニーズが高いと判断していたのに対し、保育教諭では『仲間関係』、『向社会性』、『多動・不注意』の下位尺度、『困難性総合得点』でニーズが高いと判断されており(Table 1)、母親より保育教諭の方が多くの項目で困難さを感じていることが示された。介入後に保育教諭が行ったSDQの結果を介入前と比較すると、『多動・不注意』の下位尺度(10→3)に著しい変化が見られ、特に、「お

ちつきがなく、長い間じっとしてられない」、「いつもそわそわしたり、もじもじしている」の各項目(2→0)、「すぐ気が散りやすく、注意を集中できない」、「よく考えてから行動する」、「ものごとを最後までやりとげ、集中力もある」の各項目(2→1)でそれぞれ減少した。また、それに伴い、『困難性総合得点』も減少しており、困難さが低減していることが示された。

2. ビデオ場面における関わりの変容

VFによるペアレントトレーニングにより、母親の応答の変容が図られたか、更に母親の応答の変容により、子どもの行動に変化があったか分析を行った。それぞれ3回の動画の時間割合を100として表記した。その結果、子どもからの呼びかけ生起率は1回目32.1%、2回目43.8%、3回目62.5%と増加していた。また、母親受動時の子どもへの視線生起率1回目28.5%、2回目37.5%、3回目45.0%で増加していた。また、母親の応答生起率は1回目46.4%、2回目43.8%、3回目60.0%となっており、1回目、2回目と比較して3回目で増加していた(Fig.1)。

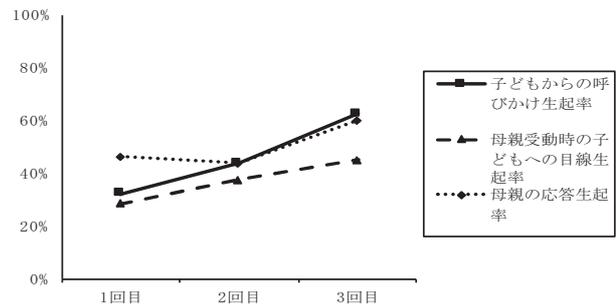


Fig.1 ビデオ分析による行動変容

3. 家庭での自発的な行動・発話を促す関わりに関する母親の自己評価

介入の前後において、自発的な行動・発話を促すことができていたか母親が自己評価した結果を時系列に基づき、前期(8回)、中期(9回)、後期(9回)に分け、「できた」を2点、「少しできた」を1点、「できなかった」を0点として各期における満点からの割合を集計しTable 2に示した。結果、後期は『ごっこ遊び』の方が、『その他の遊び』よりも自発的な行動・発話を促すことができていたが、前期と中期では差は認められなかった。また、介入後、中期に母親の自発的な行動・発話を促すことへの自己評価が下がっていたが、後期になるに従い、大きく上昇した。

Table 1 保育教諭と母親が実施したSDQの結果

下位項目	項目	母親	保育教諭 (介入前)	保育教諭 (介入後)
向社会性	他人の気持ちをよく気づかう	1	0	0
	他の子どもたちと、よく分け合う（おやつ・おもちゃ・鉛筆など）	1	0	0
	誰かが心を痛めていたり、落ち込んでいたり、嫌な思いをしているときなど、すすんで助ける	0	0	0
	年下の子どもたちに対してやさしい	1	0	0
	自分からすすんでよく他人を手伝う（親・先生・子どもたちなど）	1	0	0
仲間関係	一人であるのが好きで、一人で遊ぶことが多い	2	2	2
	仲の良い友だちが少なくても一人はいる	0	2	2
	他の子どもたちから、だいたいは好かれているようだ	1	2	1
	他の子から、いじめの対象にされたり、からかわれたりする	0	0	0
	他の子どもたちより、大人といる方がうまくいくようだ	2	2	2
情緒面	頭がいたい、お腹がいたい、気持ちが悪いなどと、よくうったえる	0	0	0
	心配ごとが多く、いつも不安なようだ	0	2	2
	おちこんでしずんでいたり、涙ぐんでいたりすることがよくある	0	0	0
	目新しい場面に直面すると不安ですがりついたり、すぐに自信をなくす	0	0	0
	こわがりで、すぐにおびえたりする	0	0	0
多動・不注意	おちつきがなく、長い間じっとしてられない	0	2	0
	いつもそわそわしたり、もじもじしている	0	2	0
	すぐに気が散りやすく、注意を集中できない	2	2	1
	よく考えてから行動することができる	1	2	1
	ものごとを最後までやりとげ、集中力もある	1	2	1
行為面	カッとなったり、かんしゃくをおこしたりする事がよくある	0	0	0
	素直で、だいたいは大人のいうことをよくきく	0	1	0
	よく他の子とけんかをしたり、いじめたりする	0	0	0
	よく大人に対して口答える	1	0	0
	他の人に対していじわるをする	0	0	0
困難性合計得点		14	21	12

Table 2 家庭での自発的行動、発話を促す関わりについての母親の自己評価

	前期	中期	後期	平均
ごっこ遊び	75.0	44.0	100.0	73.0
その他の遊び	75.0	44.0	67.0	62.0
平均	75.0	44.0	83.5	67.5

4. ビデオフィードバックのペアレントトレーニングに対する母親の評価

ペアレントトレーニング終了時に上野・野呂（2012）を参考に活動の社会的妥当性に関する評価を行った（Table 3）。本研究では、コンサルテーションにおける気づきをもとにした記録用紙を母親に渡すことで、支援の手がかりとした。その結果、対応を見直すこと等、介入による対応の改善が図られた一方、ビデオ撮影、ビデオを持っていくことへの負担感は低いということが示された。また、児童・母親共に、課題の負担感は総じて少ないという結果であった。母親からは、自身の対応が

変わったことで児童の変容が認められたため継続的に取り組みを進めたいとの報告があった。

5. 発達相談センター・認定子ども園におけるA児の変容

介入後、発達相談センターの職員、及び、認定子ども園の保育士によるA児の自発的な発話や行動について、インタビューを行った。発達相談センターでは、アニメの歌を自分から歌いたいという要求がみられ、プレイルームの場面では、玉入れゲームに誘われて参加し、勝ったことを全身で喜ぶことがといった様子がみられた。認定子ども園においては、保育教諭との関わりに変化が見られた。特に笑顔を見せると笑顔で返す、気に入った保育士のところに行って遊ぶ、隣の子とお店屋さんごっこでかかわるといった様子がみられた。また、自己刺激行動（体を揺する）をせず、製作に没頭するなどの変化が報告された。

Table. 3 ビデオフィードバックのペアレントトレーニングに対する保護者の評価

		とても思う	やや思う	あまり思わない	思わない
		4	3	2	1*
ビデオ*	・ビデオを見ることで、お母さんの対応を見直すことができたと思う。*	○			
*	・ビデオを見ることで、お子さんの対応を見直すことができたと思う。*	○			
*	・ビデオを見て、気分が落ち込むことがあった。**			○	
*	・今回学んだことは、他の場面でも応用できると思う。*	○			
*	・家庭でビデオ撮影は負担だった。**				○
*	・ビデオをもって来ることは負担だった。**				○
*	・ビデオを見た時間は適切だった。*	○			
*	・ビデオの内容は適切だった。*		○		
*	・ビデオは編集の必要があった。*	○			
*	・支援者の説明はわかりやすく・適切であった。*	○			
*	・支援の頻度は適切であった。*	○			
*	・1回あたりの支援の時間は適切だった。*	○			
全体	・今回の課題設定は、お子さんとお母さんにとって必要なものだったと思う。*	○			
	・課題の実施により、お子さんへの対応がわかったと思う	○			
	・課題は、お子さんにとって負担が大きかったと思う。**				○
	・課題は、お母さんにとって負担が大きかったと思う。*				○

○その他 お子さんの変容などについて気づいたことがあれば、記述して下さい。
 ・短い期間ではありますが、○○○○にたくさんの変化が見られ、少しずつ良くなっているように思います。ひきつづき家でもいままでのように接していこうと思います。*
 園でも楽しく自主的にかかわっていける子になれるようサポートしていきたいです。
 *は逆転項目を示す。

IV. 考 察

本研究では、VFによるペアレントトレーニングの効果として、A児の母親の養育行動の改善及び、A児の主體的なコミュニケーション行動の促進が認められた。介入終了後に母親に対して実施したアンケートでは、「家庭でビデオ撮影は負担だった」「ビデオを持ってくることは負担だった」という項目に対し、それぞれ『思わない』という回答が得られており、家庭で課題を行うことやビデオを撮影することに対する負担感は認められなかった。また、「ビデオを見ることでお母さんの対応を見直すことができたと思う」「ビデオを見ることでお子さんの対応を見直すことができたと思う」という項目に対し、それぞれ『とても思う』という回答が得られた。また、「今回の課題設定は、お子さんとお母さんにとって必要なものだったと思う」という項目に対し『とても思う』という回答が得られており、VFを活用したペアレントトレーニングについて母親の高い評価が得られていた。この結果は、母親が自らビデオ撮影を行う条件のVFでも、介入の効果が得られるという上野・野呂(2010)の結果を支持するものであった。

本研究においては、チェックリストの代わりに、家庭

での自発的行動・発話の表出リストをもとに相互コンサルテーションを実施することで、母親自身の気づきを促進させ、A児への適切な支援につなげた。「家庭での自発的行動、発話の評価表」では、中期に評価が低下したが、VFで自身の関わりを見直し、関わり方に関する課題に気づいたことで、得点が減少したものと考えられる。また、トレーニングの知見を活かすことにより、後期にかけて評価が著しく上昇したことが併せて考えられる。相互コンサルテーションの成果として、「お母さんの反応が良くなっているの、子どもの応答性も良くなっている」とのコメントが発達相談センター担当から得られたが、実際に母親からA児への応答頻度が上がり、その際に視線を合わせる頻度も上昇した。母親の受け止め方に著しい改善があったことで、A児からの自発的な呼びかけも増加したと考えられる。上野・野呂(2010)の研究では、チェックリストをビデオ視聴の場面で活用し、母親の自己記録の活用により、適切な介入方法を促したが、本研究では、母親の気づきを担当者がまとめ、家庭での支援に生かせるよう工夫した。これは、母親の負担を減らすためと、その情報を発達相談センターやこども園で共有するために有効であった。

本研究では、自己刺激行動の減少が示されたが、これには母親の受け止め方の改善と関連があると推察され

る。社会的妥当性の評価の自由記述の中において「短い期間ではありますが、A児にたくさんの変化が見られ、少しずつ良くなっているように思います。ひきつづき家でもいままでのように接していこうと思います。」と母親がコメントを寄せているように、A児への支援における意欲を喚起することができたと考えられる。その他の項目の中でも、肯定的な評価をしていた。発達相談センターや在籍する認定こども園においても、他者との積極的なかわりが見られるようになった。このことから、VFを通したペアレントトレーニングによる母親の行動変容は、児童の行動、特にA児の独語が減少し、他者とのかわりの中で音声言語の表出が増加したことにつながっていたと考えられる。

発達相談センターでの療育場面やこども園での生活の場面においても、保育士に自発的な行動や発話の場面での記録や評価を依頼し、児童の実態の変化に伴うエピソードが得られた。それら複数場面における児童の行動変容が起きたのか、その般化の要因についても、さらにデータを取得し、整理する必要があるといえる。また、今回は父親の関わりについて特に焦点を当てていないが、父親は児童と関わる場面・効果的なペアレントトレーニングの手続き等が母親と異なることが予想されるため、VFで取り上げる場面の選定など、今後、さらに検討する必要がある。

本研究は、VFを用いたペアレントトレーニングを実施し、母親の主体的な関わりを促すことで、子どもの自発的な行動の増加やコミュニケーションへの影響が認められるか検討したが、単一事例を対象としている点で限界がある。活用事例を増やすことで、母親が心理的な負担を感じずに、効果を高める方法についてさらに検討する必要があるといえる。

本研究は、日本学術振興会平成27年度科学研究費助成事業（奨励研究）の助成を活用している。本研究に参加していただいた母子に深く感謝致します。

引用文献

- 1) 原口英之・上野茜・丹治敬之・野呂文行 (2013) 我が国における発達障害のある子どもの親に対するペアレントトレーニングの現状と課題：効果評価の観点から、行動分析学研究27(2), 104-127.
- 2) 近藤清美 (2011) ビデオフィードバックを用いた母子関係の介入：ビデオ視聴後の母親の気づき、北海道医療大学心理科学部研究紀要, 7, 1-9.
- 3) 杉原聡子・米山直樹 (2014) ビデオ・フィードバックを用いた自閉スペクトラム症のある子どもの親訓練プログラムの効果, 人文論究64(3), 59-76.
- 4) 上野 茜・野呂文行 (2010) 自閉性障害児の親に対するペアレントトレーニングに関する研究－ビデオフィードバックが親の養育行動にもたらす効果の検討－, 特殊教育学研究48(2), 123-133.
- 5) 上野 茜・野呂文行 (2011) 機能的アセスメントに基づく自閉性障害児に対するトークンシステムを用いた家庭内支援に関する検討, 障害科学研究, 35, 197-208.
- 6) 上野 茜・野呂文行 (2012) 自閉症児の母親に対するビデオフィードバックとチェックリストを用いた介入の効果, 障害児科学研究, 36, 69-80.
- 7) 上野 茜・高浜浩二・野呂文行 (2012) 発達障害児の親に対する相互ビデオフィードバックを用いたペアレントトレーニングの検討, 特殊教育学研究50(3), 289-304.

The Effects of Video Feedback Parent Training Program on the Behavior of Mother of Infant With the risk of Developmental Difficulties

Abstract

The purpose of the present study was to evaluate effects of video feedback parent training program on mother's behavior, support and care, and child behavior with the risk of developmental difficulties. The video feedback program was comprised of lecture, consisted a comment by mother and staff, and exercises on the children and mother's behavior using the video of the problem at home. The study mainly use intervention situation and estimated from mother's behavior by video. And child's change was estimated by SDQ and behavior in Centers for Early Childhood Education. The result of our study was indicated that improvement of a mother attitude of acceptance. In particular, increase as fellows(1)approach from child, (2) close approach to child, (3) the frequency which turns her eyes to child. Furthermore, it indicated that independent behavior of child A in Centers for Early Childhood Education was improved as well as a home, situation not together his mother. Thus, difficulty reduced by "hyperactive and oversight" and "the total score" in SDQ checked by class teacher in Centers for Early Childhood Education. Finally, the validity of the video feedback in parent training was suggested based on mother's remark and questionnaire.

Key word : developmental disabilities, parent training, video feedback, infant, child development consultation center